BAIEIDO-TSUSHIN

梅栄堂通信

Vol.58

'12春号

創業三百有余年
梅栄堂
〒590-0943 堺市堺区車之町東1丁1番4号
TEL 072(229)4545(代) FAX 072(227)1672
ホームページURL http://www.baieido.co.jp

社長雑感

熱意をもって、慎重に、行動は恐れず…

昨年は思いもかけない東日本大震災がわが国を襲い、本当にたいへんな年となりました。東北の皆様には顧客の方々を含め、日ごろからお世話になっております。ぜひとも一日も早い復興がかないますよう、心から願っております。

私ごとでは、今年で五十歳を迎える事になりました。考えてみればわが社の経営に携わってから今年で十二年目を迎えます。無我夢中でこれまでまいりましたが、ここまでやってこられたのも皆様のお力添えがあればこそと深く感謝いたしております。

お線香業界は、昨今ますます白檀、沈香等の原料の高騰は厳しいものがございます。生産の九割近くが天然原料を主体とした、高級線香を取り扱っておりますわが社といたしましては、稀少な香材を、より大切に生かしていく責任を感じております。

ところで、原料の高騰は香木のみならず、基本原料であるたぶ粉の需要の増加による品薄で、価格が高騰しています。また中国からの漢方薬の原料となります桂皮、大茴香や甘松、そして南方原産の丁子等の輸入価格がここ四年で平均約一・六倍に高騰していると新聞で報じられています。

私どもと致しましては、何とか品質を維持しつつ、価格も現状のままで企業努力をして参りたいと考えていますが、このまま原料価格の高騰が続くようであれば、価格を見直す必要もあろうかと思われます。

その節には皆様方のご理解を賜りますよう、宜しくお願い申し上げます。

最後になりましたが、経営者として、人間としても数々の名言を残しておられる稲盛和夫氏（現JAL代表取締役会長）の言葉の中から一つ引用させていただきます。『アイデアを出すときは大胆に』『具体的に計画を練るときは慎重に』『実行に移すときは思い切って』といった内容のものがありますが、熱意を忘れず、慎重に、かつ決断したら行動を恐れずに…を指針として、より良い商品をお届けできるよう心がけてまいりたいと思います。引き続きよろしくお願いいたします。

梅栄堂社長　中田信浩

四季彩々

えびの高原　ミヤマキリシマ

群生する三万本のグラデーション

宮崎県えびの市にあるえびの高原は標高約千二百メートル。霧島・屋久国立公園の一部に属し、大自然に囲まれ、温泉や四季折々自然の景観のすばらしさから、年間約八十万人の観光客が訪れる九州屈指のリゾートとなっています。秋のリンドウ、紅葉、ススキを初め、とりわけ春のミヤマキリシマ群落の美しさはえびの高原を代表する景観といえるでしょう。

ミヤマキリシマは九州のみに存在するツツジで、霧島、雲仙など比較的標高の高い日当たりのよい高原に群生しています。もともと山ツツジが長年をかけて火山性のガスにさらされ、また高山の環境に適応して変化したものといわれています。山肌に這うように自生し、花は小ぶりで、薄紫、ピンク、紅色、白などが微妙に変化する色合いが高原を絶妙のグラデーションで彩ります。

えびの高原でのミヤマキリシマの見所スポットは、えびの高原の中心部にあたるつつじヶ丘と、硫黄山周辺。硫黄山近辺は地温が高く、陽だまりの斜面になっているため一番早く（五月中旬から六月初旬）から見頃を向かえます。一方つつじヶ丘は低い位置にありながら、冷気がたまりやすく、花の見頃は遅く六月初旬から中旬にかけてが見頃になります。

えびの高原は、硫黄山の麓にあるコバルトブルーの湖面を呈した不動池をはじめとした手軽に回れる全長四・二キロメートルの『池めぐり自然研究路』があり、三つの美しい火山湖を見渡すことができます。

ミヤマキリシマの咲くさわやかな初夏、トレッキングをかねて、えびの高原の魅力を堪能されてはいかがでしょうか。

見頃　5月中旬～6月中旬
アクセス　宮崎交通 バス(4月～11月)
JR小林→えびの高原
(小林バスセンター TEL:0984-23-3123)
九州自動車道小林インターから車で30分

Profile 米田 該典（よねだ かいすけ）
所属:大阪大学大学院医学系研究科医学史料室
薬学博士　神戸市生
専攻:文化財の材質調査と保存の科学
薬用資源学　薬史学
薬学時代には正倉院薬物を調査し、博物館へ移籍後は文化財全般に枠を広げ、いつの間にか海外の文化財にまで手を広げつつある。

香り考察

正倉院と安息香

米田　該典（大阪大学大学院医学系研究科）

十四年振りに蘭奢待出展の正倉院

今年の秋、奈良の博物館では恒例の正倉院展が開かれた。例年この展覧会の時はひときわ騒がしいが、今年は天下の名香とまで称される蘭奢待が十四年ぶりの出展とあって、例年にも増していちだんと賑やかだった。香の関係者の関心は高く、博物館でも香の実演や、香の講話の会を開いて、関心を煽っていた。展示会に協力する新聞社も開催に当たって関連記事をしばしば掲載している。新聞社の広報のおかげで、来館者は例年になく多いようで、香の関係者も多かった。そういうこともあって、小生ごときも解説役で幾度かご指名を…ということで、博物館まで出向いた。その時にお会いした方のことを少しお話したい。

その方はある大名家のご当主で、展示中の蘭奢待の前で説明をさせていただいたが、その後お一人で、混雑する観覧中の人々の迷惑とならないように配慮されながら、実に三〇分あまりもぐるぐる歩かれ、蘭奢待を上から下から、近くから遠くから幾度も見ておられた。蘭奢待の調査を行った私としては、感激して見守るだけであったが、その後、二人で館内の喫茶室で一時間半もの間、蘭奢待を中心に香の話が続いた。香のことを熟知しておられる方だけに、私は説明役の怖さを改めて思い知らされた。

因みに、その御家には江戸時代から有名な香を承継されておられる。

▲数々の宝物がねむる正倉院正倉

安息香。実物の行方は…

ところで、正倉院には蘭奢待のように香材の実物が数多く保存されている一方で、香材の名を明記しているが、実物がない布袋も少なくない。そんな一つに安息香と書かれた袋がある。安息香は仏典などでは重要な香で、正倉院にも入庫していたと思う。現在でも輸入され、よく使用されているが、多くは薬品や香粧品の原料として使われている。

古くからの沈香の集荷地の近郷には、安息香の集荷地や時にはその産地がある。たまたま私が歩いたところが、そうだったという事だけかもしれないが、実際に歩いて見ると何となく気になる香材が安息香である。

▲重要な香材、安息香。
住居は原木のすぐそばに。

安息香考察

安息香は乳白色の樹液を乾燥させたもの。当初はまさに真っ白である。時間と共に徐々に黄変し、やがて褐色になる。色変りを防ごうと、密閉した遮光容器に保存したり、冷蔵してみたが、成功とはいかない。

そこで、タイやラオスの産地で、安息香の原木に傷をつけて、流れ出る真っ白の樹液を採取して、それを実験材料にして変色のことを調べて見た。正直なことを言えば、その前に安息香のこと自体が何も判っていない事に気が付いた。以前にはシャム安息香とスマトラ安息香と呼ばれる二種があった。私が得たのは前者。そこで、後者のインドネシア産の安息香を入手したが、外観が全く違う。この違いは何？国内の市場にはインドネシア産しかない。一方の安息香の輸入はないようだ。でも現在の両者はあまりにも性状が違い過ぎる。そこで、比較する事をあきらめ、ラオス産の安息香を試料とした。真っ白な安息香がわずかな光でも時間と共に黄ばみ、化学的な変化が生じつつあることは分析実験からも判った。ただ、安息香本体の香りや重要な成分には変化は起こっていないが、減量が生じているようである。さらなる強い光の下などでは香り成分の変化や、減量は急激に生じている。実は安息香は、適切な条件下でなければ保存中に減量することが広く知られている。

▶原木から流出する安息香の樹液

正倉院にあった安息香も…粗い布袋に保存していたのでは、いつの間にか減量してなくなってしまい、袋だけが残されたのかもしれない…なんて勝手なことを考えさせてくれる。

十、十一月は常に何か新しい課題を思い起こさせてくれる時期であり、今回の正倉院展もまたそうであった。

▲現地で採取した出荷前の安息香

香りのバランスが素晴らしい

ライラック

どことなく西洋のイメージが漂うライラックの花ですが、原産国はイラン。十六世紀にスペインに伝わり、その後、地中海沿岸を中心とするヨーロッパに広がりました。十八世紀に入るとフランスで品種改良が進みフランスを代表する花になりました。のちにはイギリス、ロシア、アメリカでもたいへん好まれるようになり、文学作品にも数多く登場しています。

英名はライラック、仏名はリラ。フランスでは『リラの咲く頃』とは『いちばんいい季節』を意味する語句だそうで、長い冬を終え、リラの花が咲く五～六月の頃は、甘く爽やかな香りとともに街に活気が戻ってくるからでしょう。

ライラックは夏の暑さには弱く、乾燥した涼しい気候を好むため、日本では北海道で多く栽培され、札幌市の『市の花』に指定されています。

毎年五月の下旬には市の中心の大通公園で『さっぽろライラックまつり』が催されています。

ライラックはモクセイ科の落葉低木～小高木で、和名はムラサキハシドイ。五月中旬から六月初めにかけて薄紫色を中心に開花します。他にも白、ピンク、赤など色も多彩で、八重咲きの品種もあります。

ライラックはとてもいい香りの花を咲かせますが、花精油（アブソリュート）としてはあまり使用されていません。その理由としては、花精油にするとライラック本来の芳香とは全く違った香りになるからだと言われています。

しかし、ライラックの香りはその甘さと爽やかさのバランスの良さから人気が高く、現在は合成香料だけでなく、諸々の精油等を調合して作り出す製法も開発されているようです。

●商品紹介

花さやか《煙ひかえめ》

香りと色のリニューアル

古代ギリシャ時代から愛され続けたカーネーションの香りを中心に、バラ、スミレ、水仙などの芳しい花々を配合したお線香《花さやか煙ひかえめ》が新しくリニューアルいたしました。香りはよりやさしいカーネーションの香りに、色は紫から黒に変更。従来どおり煙ひかえめでお届けいたします。引き続き、ご愛用いただきますよう、ご案内させていただきます。

●花さやか　煙ひかえめ　大型バラ詰
1,470円（本体価格 1,400円）

●話題

南甲倶楽部

中央大学出身の経済人による交流会である南甲倶楽部の会報に中田社長が掲載されました。創業三五〇年を迎える梅栄堂の社長として、現在までの経緯と将来にむけての抱負について取材を受け、《残香飛》誕生のエピソードや、ニューヨークのギフトショーでの評判、今後の商品展開など、四ページにわたり、現在の心境を語らせていただきました。

香道体験

ドイツのハイデルベルグ大学のダイナ ユング博士が来社されました。博士はアジアの人類学の研究者。今回は取材のため日本に滞在中に、わが社を訪問されました。わが国の古くからの香り文化の実体験として、《香席》を体験されたのをはじめ、たいへん熱心に工場等を見学・取材されました。また堺にあるベトナム領事館の総領事ご夫妻も来社され、《香席》を体験されました。

▲来社されたダイナ ユング博士と

インターネットラジオ

最近注目されはじめている、インターネットラジオですがその中の番組の一つ《e-yan project》は、関西で活躍中の大阪弁でいう『ええやん！』と思える人にスポットを当てるインタビュー番組です。今回は梅栄堂の中田社長がご指名を受け、出演させていただきました。番組はインタビュー形式で、会社の歴史や、事業戦略、原料の話などをミュージックを挟みながらお話させていただきました。

◆カタログをリニューアル◆

梅栄堂の商品カタログが装いもあらたにリニューアルいたしました。カタログをご希望の方は梅栄堂ホームページよりご連絡ください。

〈今号の表紙／ヒヤシンス〉